

# 時空を超える浦島歌

常世辺に住むべきものを  
剣刀己が心から鈍やこの君

(卷九一七四一)

この歌は「水江の浦島の子を詠める一首」と題された長歌に続く歌です。

意訳すると、「せつかく常世の住人だ

ったのに、自分から現世に帰ってきてしまって。馬鹿な男だ。」と、ちよつ

ぴり羨望を交じえながら嘲りからかう歌といつたところです。

昔話の定番の一つである浦島太郎によく似た内容の歌で、丹後国風土記逸文や御伽草子にも類話がみられます。いずれも現在伝わっている昔話とは少しがちがいます。

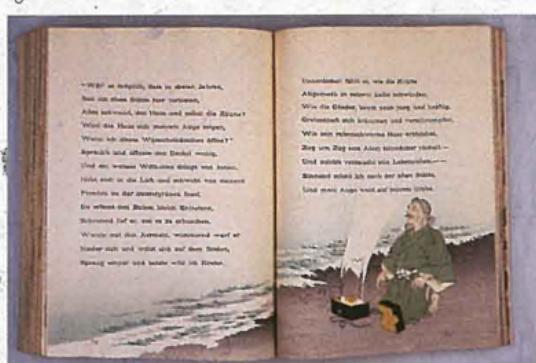
万葉歌のなかで浦島子が滯在するの

は、海の底の竜宮城ではなく海の彼方

の常世国です。尋常小学唱歌にあるよ

うに亀を助けたりはしませんし、タイ

「東の国からの詩の挨拶」より



は海外にも紹介されていました。写真はそうした例のひとつで、明治二十七（一八九四）年に出版されたドイツ語訳本です。全ページにわたつて多色刷りの挿絵が盛り込まれていて、見るだけでも楽しめます。この本では、古今集の歌や近代詩も紹介されてはいますが、ほとんどが万葉歌です。日本文化の源として、オリエンタルな魅力を感じさせたのでしょうか。

歌に詠まれている「理想の生活」を自分から捨てる人間への「鈍や」という思いは、現代でも十分理解できる感情といえるでしょう。約千三百年も昔の人人が詠んだ歌が今に通じ、中世・近世を経て現代の私たちに身近な昔話とも関係が深く、欧洲の人々にも享受されていったのです。

万葉歌には、こうした時代性や地域性を超えた広がりを持つ、奥深い魅力があるといえそうです。

すでに万葉集に載っていることにも驚かますが、この歌は、明治時代に

(万葉古代学研究所主任研究員

井上さやか)